

オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana* (Motchulsky)

【選定理由】

愛知県では茶臼山などの山間部の草原に生息し、低山地での記録は少ない。また、全県で数件の採集記録があるに過ぎない(大田, 1981)。もともと県内では産地が局限され、個体数も少ない種である。また、岡崎市のレッドリスト 2018 でも NT と評価されている(岡崎市, 2018)。

【形態】

斑紋は雌雄で大差はない。♂の翅表は濃橙色、♀はやや赤みの少ない橙色。♀の翅表の前縁端近くにやや顕著な三角形の小白斑をあらわす。裏面前翅端および後翅外半部における紫褐色部は♂では色が淡く、♀では濃色。開張 65mm 前後。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山などの山間部では少なくないが、産地は名古屋市守山区、瀬戸市、旧新城市、旧鳳来町、豊田市旭町伊熊、太田杉本地区に限定されている。

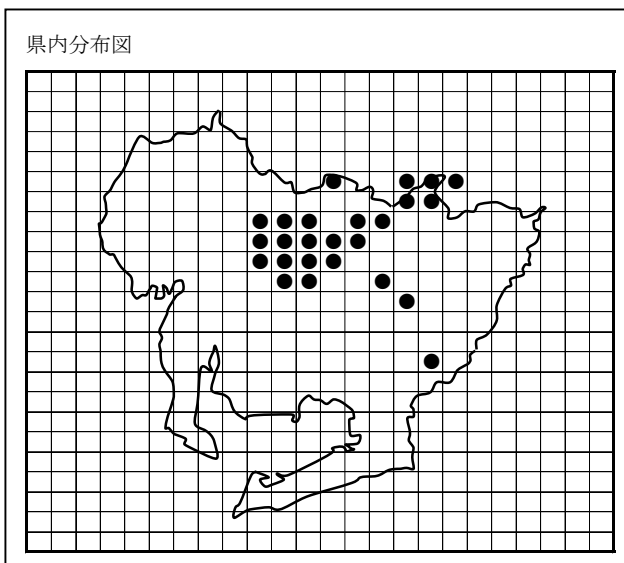
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。分布は局所的。

【世界の分布】

日本、ロシア南東部。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

特に草原に見られ、アザミなどの植物に訪花する。年 1 回の発生で、県内では 7 月から発生し 10 月ころまで見られる。食草はタチツボスミレ、ニョイスミレなどの各種スミレ科植物。越冬態は卵である。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に山地の樹林周辺の草原に生息し、ウラギンスジヒョウモンよりも森林性で林間の草原にも生息する。

【保全上の留意点】

本種の減少はスミレ類全般の減少とは考えにくい。

現時点では本種の生態に不明な点も多く、具体的な保全の提案は難しい。森林性のためウラギンスジヒョウモンと比べると減少は少ない。しかし、森林の高木化や植林などによって日が差さなくなると保全が必要である。また、森林から続く草原の保全は有効である。

【引用文献】

大田佳伸, 1981. 南設楽郡鳳来町でオオウラギンスジヒョウモンを採集. 三河の昆虫, (28): 122.  
岡崎市, 2018. 第 2 次岡崎市版レッドリスト 2018. 岡崎市.

【関連文献】

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 262-263. (財)旭高原自然活用村協会.  
白水 隆, 2006. オオウラギンスジヒョウモン. 日本産蝶類標準図鑑: 214. 学習研究社, 東京.  
日本チョウ類保全協会(編), 2019. 日本のチョウ: 203. 誠文堂新光社, 東京.

(2015 年リスト付属資料を一部修正)